
罪の骸（つみのむくろ）

雫石 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪の骸つみのむくろ

【Nコード】

N3212U

【作者名】

雫石 奏

【あらすじ】

容姿と体形は人並以下．．．名前は平凡．．．恋人いない歴24年。好きな人は、かかりつけの総合病院の院長先生。そんな私が、ある日突然事故に遭い、体だけは死にました．．．でも．．．院長先生の奥様の体を借りて蘇りました。それは神と医療倫理に背く許されない事でした．．．。《フォレストにて掲載した作品に手を加えて掲載致しました。》 ご注意ホラー異色サスペンス的な恋愛小説ですので、苦手な方は閲覧をおやめ下さい！！ 残虐性が主流ではなくストーリーに付随するもので、エンディングは心温まる内

容となっております。

第1話 さようなら私（前書き）

（ご注意）

この小説は、異色ホラーサスペンスラブ小説です。

ありえないような状況に置かれた主人公が、数奇な運命に翻弄されながら、困難を乗り越え、自分の生きる道と幸せを掴んでいく物語がメインですが、文中残酷な描写が多くございます。

こう言ったものが苦手な方、またはメンタル的に弱いか低下中の方は、閲覧をおやめ下さいますか、十分ご注意下さいますようお願い申し上げます。

閲覧される方は、自己責任において閲覧下さいますようお願い申し上げます。

第1話 さようなら私

私の名前は たなかよしこ 田中芳子 24歳。
物凄く平凡な名前・・・。

そして、容姿は人並み以下・・・。
背が低くて、太ってて、足は桜島大根・・・。
ペチャパイで、歯並びが悪くて出っ歯・・・。
顔は皮膚が弱くて赤ニキビが沢山・・・顔全体に広がってて、清潔
にしても汚い様に見られる。
まあるい団子っ鼻で、唇が厚ぼったくて、目が一重で細くて、起き
ていても寝てるように見られる事もしょっちゅう・・・。
手は豚みたいって言われるし・・・。

今は、電子部品の工場に努めてる。

国立大学も出て頭は結構いいと思うが、この容姿でなのか、第1次
面接試験で毎回落とされ、工場に就職した。

小、中、高と虐めに遭い続けた。

友達なんていない・・・。

恋人だつて・・・男の人と付き合つた事ないし・・・。

親とも仲が悪くて、孤独・・・。

私の唯一の癒しは、先生に会いに行く事・・・。
アレルギー体質で、定期的に近所の総合病院に通ってる。

そのの院長先生がとても素敵な人で、憧れの人・・・。
実物には会つた事がないけど、総合受け付け待ち合い室脇の、医師
紹介のボードに顔写真付きで載つてて・・・。

院長先生だから、ひととき大きな写真で、先生方の写真の一番上の
トップに載ってる。

一目見て好きになった・・・。

こっそり写メをとって、待ち受け画面にしてる・・・。

* * * * *

始めて院長先生の写真を見た時は、電流が走ったみたいな衝撃を受
けた。

名前は

あやせ まさのぶ
綾瀬誠伸

年齢は35歳・・・専門は脳外科医と書かれている。

なんて綺麗な整った顔・・・。

髪の毛はサラサラな感じで、清涼感溢れるナチュラルショートヘア。
目は切れ長の二重でまつ毛が長い・・・。

キリリと医師らしく、ちょっと野望を抱いているような挑発的な雰
囲気もあるが、澄んでいて綺麗な瞳をしている。

証明写真アングルなので、全身像は分からないが身長が高そうな雰
囲気・・・。

真っ白な白衣が似合ってる・・・。

一目惚れだった・・・。

こんな大病院の若き院長先生・・・。

おそらく結婚してて、可愛い子供もいるんだろうな・・・。
それに私の様な者を相手にするはずもないし、こんな醜い自分の姿
を見られたくもない・・・。

でも、一度で良いから、写真じゃなくて実物が見たいな．．．。

総合受付待ち合い室で長イスに腰かけながら、院長先生の写真を見ながらあれこれ妄想していた時に、総合受付のスタッフの女性から、名前を呼ばれた。

「田中芳子さま」

「はい」

「新しい月になりますので、保険証提示をお願い致します」

保険証をバッグから出して、渡そうとした時だった。

手が滑って弾け飛んで、ヒラリと後方に勢いよく飛んでいってしまった。

「あ．．．いけない」

飛んでいって、床に落ちた保険証カードを拾おうとした時に、医師団の集団が側を通過して、一番先頭の医師が屈んでカードを拾ってくれた。

「大丈夫ですか？」

「はい、ありがとうございます」

ふとその人を見たら、あの憧れの院長先生だった。

実物の方が数千倍も素敵だった．．．。

やはり背は高くスラッとしている。

ほんのりと、消毒薬の匂いがした。

カードを受け取る時に一瞬手が触れて、ドキッと心が時めいた。

温かくて柔らかいそして器用そうな指の長い手だった。

「お大事にしてくださいね」

ふわりと優しい笑顔を向けてくれた・・・。

「はい、ありがとうございます」

私も満面の笑顔に向けたけど、内心見られなくなかった。

こんな醜い私を・・・。

顔色ひとつ変えずに優しい笑顔を送ってくれたけど・・・私の事、不細工な子だなんてきつと心の中では思いましたよね・・・。

憧れの先生に会えたのは嬉しかったけれど、何となく凄く落ち込んだ・・・。

あんな至近距離で、醜い私をみられた・・・。

今日はトレーナーにすり切れたジーパン姿で、服装もかなりダサイ・・・。

帰り道、落ち込みながら、病院前のバス停に突立ってバスを待っていた。

その時だった・・・。

物凄いブレーキ音とガシャンとぶつかる音がして、ハッとそちらの方を見たら、対向車のトラックと接触した改造車っぽいスポーツカーがスピンしながら自分の方に向かって来ていた。

まるでスローモーションのようだった・・・。
真っ青になった改造車に乗った青年の恐怖の顔もはっきり見えた・・・。

そして記憶が途切れた・・・。

* * * * *

目が開いた時は、集中治療室の中だった……。あちこち管で繋がれて身動きが出来ないし、息苦しいし、頭が凄く痛い……。

それに気持ち悪くて吐きそう……。

「う……う……うっ……あ……あ……」

喋りたいけど喋れない……。

私一体どうなっちゃったの？

苦しいし、痛いし、辛いよ……。

気がついた私を見て、看護師さんが「院長先生」って呼んでいた。

心配そうな顔の院長先生が視界に入った。

覗き込むように私を見ている……。

なぜ院長先生がここにいるの？

『やめて！ 醜い私をそんなに近付いて見ないで!!』

恥ずかしくて穴に入りたい……。

きっと私、酷い顔してる……。

あまりにも気持ち悪くてゴフツと吐いた。

喉に管が繋がれているみたいで、戻したら詰まってしまったみたいで息が出来なくなった……。

苦しくて体が反り返って痙攣し出した……。

それと同時に、モニターが警告音を発して赤いランプが点灯し出した……。

回りの看護師や医師……それに院長先生が慌ててせわしく動き回るのが見えた。

そしてまた私は記憶が無くなった……。

「．．．さん．．．聖花^{きよか}さん．．．」

そう呼ばれて「えっ？」って思った．．．。

違いますよ、私は芳子ですよって言おうと思って、一生懸命声を出そうと思っただけれど、声が出ない．．．。

「うーっ．．．あ．．．あ．．．」

何度も声を出そうとしたけど『う』とか『あ』しか出て来ない。

「気がつきましたね．．．。

ずっと麻酔で眠らされてる状態で、さっき覚める薬を投与したばかりなんですよ。

喉に呼吸確保の為の管がついてますから、喋れませんから無理しないでくださいね」

私、聖花じゃないのに．．．。

院長先生が私の顔を覗き込んで、入院着の前紐を解かれて、パツと開かれて、聴診器をあてた．．．。

『キヤーツ!!』って思った。

入院着を開けられたら、下着もつけてないで、胸が丸見え状態．．．。

『やめて!!』って思ったけれど、体は全然動かないし、声も出ない．．．。

「熱も下がったし、胸の音も良くなったね」

そう言っつて、丁寧に入院着の紐を結んで、優しく蒲団をかけてくれた。

院長先生は、ちょっと緊張した面持ちで、私を真直ぐ見て、口を開

いた。

「これからちよつと、驚くような話をすると思つけど、興奮しないように気をつけて、話を聞いてね」

そして私は、院長先生から震撼させられるような話を聞いた．．．

田中芳子だった私の体はもうこの世には無く、私の両親が引き取つてすでに茶毘に伏されてしまっていた。

あの事故で、私の体は即死状態で、脳の損傷は全く無く、脳波だけははつきりしていたそうだ．．．。

そして、院長先生の奥様は不慮の事故で、体は五体満足だけど脳死状態で、ずっと集中治療室で眠っていたそうだ．．．。

そして私は．．．私は．．．私はーっ！！

脳死状態の院長先生の奥様の体に脳移植させられて蘇ったそうだった！！！！

その奥様の名前は 綾瀬 聖花 24歳．．．。

だからさつき『聖花さん』って呼ばれたんだ．．．。

その衝撃的な話しを聞いて、私はまた呼吸困難になって、モニターが警告音を鳴らし、赤く点滅し出した．．．。

(2話に続く)

第1話 さよなら私（後書き）

ちよっとダークな小説ですので、ホラー用のもう1つのペンネームで発表しています。
メインは恋愛小説です。

第2話 いきなり院長先生の奥さんに？（前書き）

（ご注意）

この小説は、異色ホラーサスペンスラブ小説です。

ありえないような状況に置かれた主人公が、数奇な運命に翻弄されながら、困難を乗り越え、自分の生きる道と幸せを掴んでいく物語がメインですが、文中残酷な描写が多くございます。

こう言ったものが苦手な方、またはメンタル的に弱いか低下中の方は、閲覧をおやめ下さいますか、十分ご注意下さいますようお願い申し上げます。

閲覧される方は、自己責任において閲覧下さいますようお願い申し上げます。

第2話 いきなり院長先生の奥さんに？

それから私は、衝撃的な話しに興奮し続けて、ずっと精神安定剤と睡眠薬を投与し続けられていた……。

朦朧とする意識の中で、看護師さんや院長先生や、補助の先生が入れ替わり立ち替わり世話する姿をぼんやりと眺めていた。

1週間ぐらい過ぎただろうか……。薬をだんだん減らされて、少しずつ意識が定まってきた。

そして呼吸も安定して、喉の呼吸器を外された。

外される時は苦しくて『グエーッ！！』って声を上げたと思う……。

『みつともないなあ……。』冷静にそんな事を思っていた。

そして、変わりに鼻の所に呼吸器の管をつけられた。

「喉の管が取れたから、楽になったでしょう？ だんだんはつきり喋れるようになりますからね」

看護師さんが優しくそんな笑を浮かべて話しかけてきた。

「は……い」

あ……本当だ……。喋れたって思った。

「何処か苦しい所とか、痛い所はありますか？」

「……背中が痛い……し、頭も重いし……。体中痺れたような感じが……」

はにかみながら、一生懸命に伝えた。

とにかく体中が重くて、痺れて凝り固まって．．．自分の体がどうにかなくなってしまったような．．．訳の分からない今まで感じた事のない不快感だ．．．。

「ずっと寝たきりでしたからね．．．もう少し我慢してくださいね。もう少し体が回復したら、リハビリを始めて体を動かせるようにしていきますよね。そうしたらだんだん不快感も減っていきますからね」

またまた優しい笑顔の看護師さん。その笑顔に癒されます．．．。

そのうち院長先生がやってきた。

「お．．．喉の管が取れたね」

優しくそこに笑顔を向けられて、ドッキリする。

相変わらず爽かで素敵．．．。

「どれ、胸の音聞こうか？」

そう言って、また服の胸元を開かれて、二つの丘が現れた．．．。

心の中で『きゃっ！』と悲鳴を上げた。

恥ずかしい．．．恥ずかしすぎる．．．。

心臓がバクバク．．．ドキドキして血圧が上昇する．．．。顔が火照ってくるのが分かる．．．。

ひんやりした聴診器を当てられて、くすぐったくてピクリとした。

そんな自分が恥ずかしい．．．。

ちよつと真剣な顔に変化した院長先生．．．。

「あれ？おかしいな．．．まだ呼吸苦しい？」

そう聞かれて、首を横に振った。

『ち．．．違うんです．．．恥ずかしいんです』心の中でつぶやいた。

院長先生はまた丁寧に服を着せてくれて、ふわりと蒲団をかけてく

れて、ベッド脇に下がっている診察記録カードを手にとって、真剣な顔で見た。その何気ない姿が恰好良いつて思った。

「痛い所とか、苦しい所とかあるかな？」

憧れの院長先生・・・声も出せないくらい恥ずかしくて・・・。含羞みながら首を横に振って返事をした。

ふと目をスライドさせて、入院患者氏名に『綾瀬 聖花』と書かれていて、驚愕する。

「わ・・・わ・・・たし・・・綾瀬 聖花 なんですか・・・?!」

驚いて含羞んでるところではなくて、聞いてみた。

「君に確認しないで、こう言う状況になってしまい、本当に申し訳ないと思うが、田中芳子さんは死亡と言う事でもうこの世には存在しないんだ・・・。」

だから、綾瀬聖花として、生きていつて欲しいって思ってる・・・。穏だった院長先生の表情が急に真剣な表情に変わった。

「そ・・・の方って、先生の奥様？」

「そうなんだ」

「私、どうやって・・・生きて行けば？」

「もし許してもらえるのなら、僕の妻として・・・それが嫌なら離婚しても・・・。」

君の事は責任を持ってずっと面倒を見るつもりだ。先の事は、ゆっくり考えていつて欲しいと思ってる」

ええーっ！いきなり先生の奥さんに？
憧れの先生だけど．．．。
どうすればいいのか全く分からなかった．．．。

それから、私が脳移植されてから1か月も過ぎていたという事を知り、とても驚いた．．．。

それから数日が過ぎ、体の方が回復してくると、リハビリが始まりました。

今日は、少し体を起こして見ましようと言われて、電動ベッドで体を起こされた。

自分の体が鉛のように重くて辛い．．．。
起き上がるだけなのにこんなに辛いなんて．．．。

元気な頃には何も考えないで、当り前のように自由に体を動かしていたけれど、体を起こすだけなのに、こんなに辛いなんて！！
「だめ．．．辛いです。」って言ったけど、リハビリの先生は、結構スパルタ？

聞き入れて貰えなくて、「もう少し頑張ってみましょう」と言われ、もっとならされた。

目がグルグル回って、貧血を起した。
その後気分が悪くなって吐いてしまった。

慌てて院長先生がすっ飛んできた。
院長先生って優しいですね．．．。

ひんやりしたタオルを額に乗せられて、手を優しく擦ってくれた。
「家内はずっと寝たきり状態だったし、筋力もかなり落ちていたからね。

毎日少しずつ起き上がれる様に、歩けるように頑張ろうね」

優しく励まされた。

憧れの院長先生が．．．私の事を．．．私の事だけを見つめてくれている．．．凄く嬉しかった。

それから、看護師さんに鏡が見たいって言ったら、院長先生もやってきて、手鏡を持って映してくれた。

初めて見る自分．．．聖花さん．．．。

頭は坊主で包帯グルグル巻きだったけど、私の憧れた美しい人だった．．．。

まつ毛が長くて、瞬きする度にパサパサ蝶が羽を休ませるように、優雅に動く。

くつきり二重の愛らしい目．．．。

瞳も澄んだ薄茶色で、色白で頬が薔薇色．．．。

くちびるがセクシーでキュービツトの様に愛らしい．．．。

鼻筋が通ってて、高くて形がいい．．．。

それになんて指が長くて、スリムで．．．。

胸は豊かで大きそう．．．。

「凄く綺麗．．．とっても素敵な綺麗な方なんですネ．．．聖花さんって．．．」

でも、これは本当は私ではない聖花さんの体．．．それが今は私？
なんか疲れてしまった．．．。

胸が息苦しくなって、フーツとひとつため息を漏らした。

「疲れてしまったかな？」

「はい．．．」

「しばらく寝て、休んだほうが良いよ」

院長先生が優しく蒲団を整えてくれた。

すっかり寝てしまったみたいで、起きたらもう夜の9時だった．．．
ふと目を空けたら、院長先生が椅子に座ってベッドの傍らで、切なげな表情をして、私の顔を見守っていた。
それから．．．驚いてしまった．．．。
先生が顔を近付けてきて、いきなりふわりとくちびるを重ねてきたのだ．．．。

私のファーストキス．．．。

あの憧れの、院長先生が私にキスを．．．?!

「えっ？」

「あ．．．ごめん。つい．．．」

「い．．．いいえ．．．だ．．．大丈夫です。奥様の事愛してらしたのですね．．．」

「ああ．．．」

ちよつと辛そうに目を反らした。

考えたら凄く変な会話だ．．．。

院長先生の目の前にいる人は、奥さんの聖香さん．．．。
だけど、中身は私．．．。

「お願いがあるのだけど．．．」

「はい？」

「もし僕の事が嫌いじゃなかったら、まだ当分先になるかと思うけ

ど、退院したら僕の妻として、僕の家に来てくれないか？」

「……今の一応ポーズなのかな？」

でも、どうせ男の人に相手にもされなかった私……。こんな素敵な院長先生の奥さんにならなくてもいいかも……。というか、奥さんになりたい！！

「わかりました……」

「私の妻として一緒に暮らしてくれるのかい？」

「はい。ふつつか者ですがよろしくお願いします」

「ありがとうございます……」

院長先生は凄く嬉しそうに微笑んだ……。

こんな私がああ素敵な憧れの先生のお役に立つことができ、喜んでもらえて、私も幸せな気持ちだった……。

好きな人に喜んでもらえるのって……。嬉しくて幸せだ……。

* * * * *

それから半年……。

体は順調に回復していつて、頭の手術跡も綺麗に直り、包帯も取れまだ凄く短くて、スポーツ刈りっぽいけど髪の毛も伸びて来た。歩く事も出来るようになり、食事もとれるようになった。

でも、薬は沢山飲まされる……。

拒絶反応を押さえる薬や、感染しない為の抗生剤など……。元々薬は苦手な方なので、毎回鳥肌が立ちそうなくらい辛い……。

これを一生飲まなくてはいけないようだ。

やっぱり大変な手術をしたのだから、元通りの元気な自分には戻れ無いのね……。

それに、聖花さんが私を嫌って受け入れてくれないのか？時々酷い頭痛が襲ってくる。

今日は凄く調子が悪くて、頭痛が酷い……。リハビリの時間が来たけど、起き上がる元気も無い……。

「聖花さん、リハビリの時間ですよ」

看護師さんが呼びに来た。

「すみません……。凄く頭が痛くて……」

「じゃあ院長先生に確認してみますね」
看護師さんが確認の電話を入れた。

「熱がないし、頑張ってみましょって事なので……」

「わかりました……」

益々頭痛は激しくなってきたが、渋々体にむち打って、頑張って起き上がった。

ベッドから立ち上がろうとした時だった……。

鼻水のような物が鼻から落ちる感じがして、手で押さえたら鼻血だった……。

「鼻血……」

「あら大変!!」

看護師さんが慌ててティッシュを渡してくれた……。

だんだん量が増えてきて、布団に赤い染みがどんどん広がっていく。普通じゃないと思った様で、看護師さんが慌ててナースコールを押して、携帯で院長先生に連絡した。そして一生懸命小鼻を押さえて止血を試みてる。

恐くなって私はブルブル震えた．．．。

院長先生がすぐに飛んできて、他の看護師がストレッチャーを持って来た。

「こわい．．．」

院長先生の顔を見て、私は訴えるように言った。

「大丈夫!!」

真直ぐな目で、安堵させるように院長先生が言った。

個室からまた私は集中治療室に移って、点滴の毎日．．．。髄膜炎を起しかけていたみたい．．．。いつになったら退院出来るのかしら．．．。

長い入院生活にもだんだん飽きてきて、辛い気持ちが大きくなって来た。

これなら、田中芳子のまま亡くなっていた方が．．．。ふといけない事が思い浮かんでくる．．．。

集中治療室のベッドの上．．．。

今まで泣いた事が無かったけれど、私は初めて泣いた。多分世界中で脳移植手術を受けた人は私が初めて．．．。また予測も付かない事がこの先色々起きるだろう．．．。

とても孤独で凄く恐ろしい・・・。

いつも不安感を抱きながら、病院のベッドに縛りつけられて、自分じゃない違う他人の体の中で生き続けなくてはいけないの？

そして、もし死んだとしても、身内はだれ一人その死を知らない・・・。

田中芳子が死んでも悲しんではくれない・・・。

もし今私が死んでも、院長先生が悲しむのは、私ではなくて、聖花さんの体が死んだ事への悲しみだろう・・・。

泣いていたら、院長先生がやってきて、ティッシュでそっと涙をぬぐってくれた。

「辛い？ 苦しい？ 何処か痛い？」

とても心配そうな顔・・・。私じゃなくて、聖花さんの事を心配されてるんですね？

「私・・・心が辛いです。先生は私が・・・田中芳子が死んでも、悲しまないと思います。」

奥様の体が亡くなってしまっただけです。聖花さんの事を思っただけです。

私が・・・田中芳子が死んでも、誰も泣いてくれないから・・・凄く辛いです」

困ったような、辛そうな顔をして、先生は黙って私の顔を見つめていた。

そして優しく手を取って、いつまでも擦っていてくれた。

(第3話に続く)

第3話 退院・・・先生の家へ・・・（前書き）

（ご注意）

この小説は、異色ホラーサスペンスラブ小説です。

ありえないような状況に置かれた主人公が、数奇な運命に翻弄されながら、困難を乗り越え、自分の生きる道と幸せを掴んでいく物語がメインですが、文中残酷な描写が多くございます。

こう言ったものが苦手な方、またはメンタル的に弱いか低下中の方は、閲覧をおやめ下さいますか、十分ご注意下さいますようお願い申し上げます。

閲覧される方は、自己責任において閲覧下さいますようお願い申し上げます。

第3話 退院・・・先生の家へ・・・。

2度目の集中治療室では、すっかり心が弱くなってベソベソ泣いてばかりいた。

私が泣くと、先生もとても辛そう・・・。

この先どうしていいのか全く分からないし、先々の事を考えると暗闇のようで心細くて不安で心が押しつぶされそうな気持ちになるけど・・・。

でも・・・何度も危険な目に遭っても私は生きている・・・。
神に背き生かされている命かもしれないけど、生きなくちゃ・・・。
そして、いつか答えを見つけよう。

・・・自分の進む道を・・・

集中治療室に入って一週間目に、一般の個室病棟に戻る事ができた。また起き上がる練習から、歩く練習とリハビリのやり直しか・・・。
辛いしうんざりだけど、頑張らないといつまでもベッドに縛りつけられたままになってしまう・・・。

頭痛の方は点滴が効いたのか、最近治まってきている。

今回は集中治療室にいたのが1週間だけと、脳移植の傷は綺麗に治っていた為か、すぐに歩けるようになった。

外にはもちろん出れないが、入院病棟と同じ階のフロアなら歩き回って良いと言われ、リハビリも兼ねてあちこち散策してみる。

私のいる個室病棟は、ホテルで言うとスイートクラスなのか？

入院病棟らしくないゴージャスな作りで、部屋が広くて明るいし、電動式の豪華なクッションの良いベッド、大きなバスタブ付きのバ

スルーム完備で、付き添いの家族用の個室もついているし、サイドテーブルの上にはパソコン付きのテレビがあるし．．．。冷蔵庫やミニキッチンもついてて至れり尽くせりって感じた．．．。私の病棟の階は、最上階で、夜は都心の夜景が銀河のように光り輝いて美しい．．．。

部屋を出て廊下を少し歩いた所に音楽サロンのような部屋があり、グランドピアノが置いてあった．．．。

看護師さんに聞いてみたら、使用してない時には使っても良いですよと言われ、人に聴かれるのは恥ずかしいので、人のいなさそうな時間帯を見計らって、弾いてみる事にした。

．．．．音楽サロンルーム．．．。

扉をそつと開けたら、階段一段ぐらい高くなっているステージの所に立派なグランドピアノがあった．．．。

その回りに椅子が弧を描くように並んでる。100人ぐらい座れそうかな？

窓は大きな床から天井までのはめ込み硝子で、その外には都心のビル群が一望出来る。

なんか不思議な感じがした。

あの日、アレルギーの定期検診で病院に行つて、帰り道に事故に遭つて．．．。

そして私は別の人に生まれ変わった．．．。

外には色々な人が思い思いに考え行動し、様々な生活をしているんだ．．．。

私1人、みんなとは違う、世界でただ1人違う．．．。そして病院の中でずつと籠の鳥だ．．．。

グランドピアノの蓋を開けて、椅子に座った。

その前に座ったら、ちよつと人間らしいみんなと同じ世界に引き戻された様な気分になってくる。

だけど、パジャマにガウンを着て、マスクをして、頭には毛糸の帽子．．．そしてスリッパを履いている、今の自分の姿に現実引き戻される。

そしてピアノに映った自分の姿．．．。

．．．．．私は聖花さんの殻をかぶったエイリアンなんだ．．．。

気を取り直して、ピアノの鍵盤をポロンと弾いてみた。

田中芳子だった自分に引き戻された気がした。

田中芳子だった私はピアノが得意だった。

小学校からずーっと習ってて、高校2年で習うのは辞めたが、その後は独学ですつと弾き続けた。

結構上手でちよつと自慢出来るかなって思える腕前．．．。

聖花さんの指は長くて細いから弾きやすそうって思った．．．。

弾き始めたら、私はすっかり田中芳子に戻って、熱中して弾きまくった。

かなり長い間弾き続けていたと思う．．．。

ハッと気がついたら、サロン椅子が満席になっていて、みんなが楽しそうに幸せそうな表情で、私のピアノに聴き耳をたてていて、弾き終った途端に拍手を贈って下さった。

そして席の一番後方の壁に寄り掛かって、院長先生が感動した顔で頬を染めて笑顔で立って一生懸命拍手していた。

「恥ずかしい・・・」

院長先生が私の所にやって来て、「とても素晴らしいと感動したよ・・・」って言った。

「お恥ずかしいです」

「芳子ちゃんは凄いな」

『エツ?!』って思った。

今、先生が芳子ちゃんって・・・。

『私の事、奥様じゃなくて、芳子って思って下さってるんですね』

嬉しくて、それから空いている時間はしょっちゅうピアノを弾きにサロンに行った。

院長先生も、空いている時間にはピアノを聴きに来てくれた。

私が入院病棟にいない時には、音楽サロンにいるって看護師さんが真直ぐ捜しに来るほど入り浸った。

・・・そして・・・あの事故から1年と言う時間が過ぎていた。

私は髪の毛も、違和感なく女性のショートヘアになり、ニット帽をかぶらなくても良くなった。

うっすらと大きく頭に十文字にある手術痕も髪の毛で隠れ、外出もできるようになり、退院を迎えた。

『院長先生』といつも呼んでいたが、名前で呼んで欲しいと言われ『誠伸さん』と呼ぶようになっていた。

今日から、先生の家に一緒に住む．．．。
病院から歩いていける距離の高級高層マンションの20階．．．。
家政婦を雇おうかと言われたが、「自分で何でもできますから」と
断った。

聖花さんはあまり家庭的な人じゃなかったのか？

家事は苦手な人だったみたいだ．．．。

「何でもできますから．．．。」と言ったら、非常に驚いた顔をして、
その後に嬉しそうな表情を浮かべた。

先生の家に行く途中、聖花さんの私物は全て処分したと、洋服や靴、
バッグなど一式と、ドレッサーやそれから結婚指輪も．．．。
前の奥さんのお下がりには嫌でしょうと新しく買ってくれた．．．。

院長先生．．．いや、誠伸さんは優しい人なんですネ。

でも良いのですか？奥様との思い出の品を全て処分してしまって．．．
私の為に．．．。

姿形は聖花さんだけど、誠伸さんは、私を別の人として．．．芳子
として、尊重してくださるのですね．．．。

それからもつと嬉しい事が．．．。
マンション一部屋を防音ルームにして、ピアノを1台買って下さっ
た．．．。

そして、僕に色々聴かせて欲しいって言って下さった．．．。

聖花さんは料理一切ダメだったそうで、食器やキッチンツールなど
あまり無いとかで、追々買い足していけばいいけれど、必要最低限
の物を揃えようと、お鍋や食器など揃えた。

先生とお揃いの夫婦茶わんと湯のみ．．．マグカップ．．．。
仲良くあれこれと捜す時．．．。
とても嬉しくて、心がウキウキと弾んでいた。

辛いつて思つて、死ねば良かったなんて思つた事もあつたけど、私
幸せ．．．。

憧れの院長先生の奥さんになつたんだ．．．。

「他に何か欲しい物はない？」

ふわりと優しい笑顔を投げ掛けられて、ドッキリした。

「あの．．．画材道具が欲しいのですが．．．」
含羞んで俯きながら、ポツリと言った。

「いいよ。絵を描くんだね」

「はい．．．。私大学で絵を学んだ事もありまして．．．」

「え？ 何処の大学？」

誠伸が目を丸くした。

「芸大です」

「すごいね。国立の芸大卒なんだ．．．」

「はあ．．．。でも、就職で全て落とされて、しがない電子部品の
工場で働いてましたから．．．結局何の役にも立ってませんが．．．」

「

「頭いいんだね」

「いいえ．．．。とんでもありません！！先生いえ．．誠伸さんと比べたら、月とスッポンぐらいです。あ．．．。比べる事自体失礼な話ですよね！！」

「そんな事ないよ．．．僕は絵を見たり音楽を聴いたりする事は好きなんだけどね、演奏したり描いたりするのは全くダメで．．．。だからそう言う才能のある人は素晴らしいなって思うんだ」

「そう言って頂けて、嬉しく思います」

誠伸から眩しそうな熱い目で見られて、体は火照り気が遠くなりそうになった。

誠伸のマンションに到着し、「さあ入って！」と玄関扉を開けてくれて、おずおずとキョロつきながら入った．．．。

「病院の方が忙しくて、ちょっと汚くてごめんね」

そう言いながら頭を掻いて照れる姿が青年ばくって素敵だな．．．。

確かにちよつと汚れてるかも．．．。

椅子に服が沢山置かれてて、シンクの中に洗ってない食器も山になつてる．．．。

でも、そんなのは私が綺麗にしますから、大丈夫ですよって心の中で呟いた。

それからまだ、体の方は本調子とまではいかなかったけれど、憧れの院長先生の奥さんになれたんだからって、張り切って家事をした。

部屋は見違えるように綺麗になって、Yシャツも前はクリーニングに出していたそうだが、おしゃれ着洗いの洗剤で丁寧に洗って糊付けして、丁寧にアイロンをかけてあげたら、物凄く感動してくれた。私の作る手料理にもとても感動してくれて・・・。

『君は何でも出来て本当に凄いね』って、嬉しそうに言ってくれた。

そんなに感動してくれて、喜んでくれて・・・。

聖花さんはなにもしてくれなかったのですか？

こんな素敵な誠伸さんに、優しくしてくれなかったのですか？

・・・とても不思議に思った。

それなのに、凄く好きで愛していたのでしょうか？

『聖花』さんを・・・。

私はやっぱり聖花さんの身代わりですか？

時々そんな事を考えると、淋しくなった・・・。

退院して、誠伸さんの家に一緒に住むようになって1週間・・・。

張り切って頑張りすぎたのか、無理がたたったのか、高熱を出した。

誠伸さんから「少し入院しようか？」って言われて、「病院に戻りたくないです」って我が儘を言った。

困った顔をして、「じゃあ家で少し様子をみるけど、熱が下がらなかったら入院するんだよ」って言われた。

さすがに院長先生・・・。

病院から点滴や注射や薬を部下に届けさせた。

実はすっかり注射と薬嫌いになってしまった・・・。

腕にゴム管を巻かれ、指で血管の位置を探り、消毒の綿で拭かれ．．．
誠伸さんが、点滴の針をジツと見て、今にも刺そうとする姿が怖い．
．刺されるのが恐くて両目を瞑って構えてたら、「注射嫌いな
？」と言われた。

「長い入院生活で大嫌いになってしまって．．．」

答えてる間にあっけなく腕にブスリと刺された。
先生は上手なんだ．．．そんなに痛くなかった。

「大丈夫？」

「今のは、そんなに痛くなかったです。

下手な人は痛くて．．．腕が腫れるし．．．」

「神経を除けて上手に刺せばそれ程痛くないんだけどね。経験だからね．．．」

「これからは、ずっと誠伸さんにやって欲しいな．．．」

「いいよ」

「よかった。これでもう恐くないです」

「ずっと痛く辛い思いさせてしまって、ごめんな」

優しく髪をなでられて、気持ち良くなって眠ってしまった。

目覚めたらベッド脇で、椅子に座って誠伸さんが寝入ってた。

点滴と薬が効いて、熱も下がりすっかり良くなった。

そっと毛布をかけようとしたら、誠伸さんが目覚めた。

「ごめんなさい、起こしてしまいましたね」

「いや、いいんだ」

「熱も下がりましたし、入院しなくても良いですよね」
念を押す私・・・もう病院には戻りたくない・・・。

「うーん。何で熱が出たのか調べたほうがいいんだが・・・」

「もう戻りたくないです・・・」

「しょうがないな・・・。じゃあまた高熱が出たら、入院しますって約束してくれたら・・・」

「約束します」

懇願するような顔ですがるように言った。

「じゃあ、約束のキスね」

いきなり抱きしめられて、キスされた。

キスされるのはこれで2度目?!

でも・・・。

今回のキスは・・・。

ドキッ!びびりしちゃう・・・。

(第4話に続く)

第4話 初めての夜（前書き）

（ご注意）

この小説は、異色ホラーサスペンスラブ小説です。

ありえないような状況に置かれた主人公が、数奇な運命に翻弄されながら、困難を乗り越え、自分の生きる道と幸せを掴んでいく物語がメインですが、文中残酷な描写が多くございます。

こう言ったものが苦手な方、またはメンタル的に弱いか低下中の方は、閲覧をおやめ下さいますか、十分ご注意下さいますようお願い申し上げます。

閲覧される方は、自己責任において閲覧下さいますようお願い申し上げます。

第4話 初めての夜

「約束ね。」って言われて突然抱きしめられて、誠伸さんが深いキスを落としてきたので驚いて固まってしまった・・・。

その初心な反応に、誠伸は口を離して「芳子ちゃんはずぶなんだね」って言った。

また芳子ちゃんって言うてくださった・・・。

「私・・・この間、誠伸さんにキスされたのがファーストキスで・・・。男の人とお付き合いした事がないから・・・。」

真っ赤になって俯いて、意味もなく、布団の縫い目を指でなぞった。

「可愛いね」

高揚して嬉しそうに頬を染める誠伸・・・。

「誠伸さん、昔の私の姿、知ってますよね？」

「ああ」

「あんなブスで、やぼったい人、誰も相手しませんよ・・・。声かけられた事もないし・・・。」

「そうなの？」

「そうですよ」

「こんなに可愛い人なのに・・・。」

「それは、聖花さんが美しい人だから・・・。」

そう言ったら、曇った顔をした。

「聖花は姿形は綺麗だったかもしれないけど、冷たい奴だったからな．．．」

「えっ？」

意外な言葉を聞いて驚いた。

「実はあまり夫婦仲よくなかったんだ．．．」

「えっ？奥様を愛してらっしやったんじゃ．．．」

「好きになって結婚したけど、結婚してみたら我が儘で、自分中心に世界が回ってる感じで、ヒステリーだったし．．．。僕は仕事に没頭していつて、あまり家に帰らなくなってね．．．」

「ええっ」

「自殺だったんだ．．．。睡眠薬と酒を大量に飲んで．．．。意識朦朧状態で、僕に電話をかけてきてね．．．。」

慌てて家に戻った時には意識不明で．．．。脳死状態になって．．．。

君が病院に運ばれた日の夜に、聖花の生命維持装置を止めて楽にしてやろうって決めていたんだ。

そうした所、君が事故に遭って、運ばれて来て．．．。

君は虫の息で、死にたくない。怖い。って何度も呟いていたんだ．．．。

丁度、院内の研究室で脳移植の研究を進めてて．．．。猿で移植を数例成功させていた時で．．．。

で．．．。神に背くような事をしてしまった．．．。」

「じゃあ、奥様を蘇らせる為にはないのですか？」

「蘇っても、妻じゃないよ．．．別の人だ．．．。」

「死にそうだった私を奥様の体を使って、救ってくださったって事なのでしょうか？」

「生きたいって言つて、虫の息の中、必死に生きようとしてる君を救ってあげたかった．．．。」

妻は自らの手で死を選んで、望み通りになっただ。

妻の体は、臓器移植の献体に出そうと思ってたからね。

君の体は臓器移植では間に合わない状態だったんだ」

「私．．．奥様の死のお陰で生き永らえてるんですね」

「辛いかな？」

「とても辛いです。時々私は私なのか？私は一帯誰なのか分からなくなつて来ます」

「君は姿形は別の人になつてしまつたけど、芳子ちゃんだよ。

妻は凄く冷ややかな目をしていて、目を合わせるとゾクツとするぐらいだったんだ。

君が目覚めた時、凄く柔らかな澄んだ目をしていて、綺麗な瞳だ。な
って感じたんだ。

聖花の声はきつくて、刺さるようだった．．．。
だが、芳子ちゃんの声は天使の声のように優しくてやわらかで、思
いやりに溢れてて．．．。

悪魔が天使になって戻って来たって思った．．．」

「私を奥さんとして、この家に連れて来たのは？」

「こつ言う事になった責任をとろうと心に決めていたし、今ではだ
んだん魅かれて、君を抱きたいって欲望を抱いてしまってる．．．」

「えーっ」

信じられなかった．．．。

「私の事を、愛して下さってるのですか？」

「田中芳子さんの事を愛してる．．．。あの時病院でキスしたのは、
芳子ちゃんに．．．辛そうな君が可哀想で、守ってあげたくて、そ
れから愛おしく感じて．．．」

物凄く感激感動して、涙が溢れ出した。

「嫌だったかな？」

困った顔の誠伸さん．．．。

「嬉しくて泣いています」

「えっ？」

「私、定期的にアレルギーである病院に通院してて．．．。総合受付の待合室にある先生方の写真を見て、一番上に大きく掲げられている誠伸さんの写真を見て、一目惚れしてしまつて．．．。こっそり写メ撮つて、携帯の待ち受けにしてみました。ずっとずっと．．．憧れてました．．．。」

「じゃあ、芳子ちゃんも好意を持ってくれるのかな？」

「はい」

「凄く嬉しいよ」

「私も嬉しいです」

「体が回復したら、君の事抱いても良いかな？」

「恥ずかしいです．．．。」

「嫌？」

「嫌じゃありませんけど．．．。」

「聖花の体は初めてじゃないけど、芳子ちゃんは初めてなんだよね。優しくするから．．．。」

「は．．．い。」

ああ．．．これは夢？

先生が、私自身の事を思つて下さつていたなんて．．．。

嬉しくて幸せだった．．．。

「じゃあ、今日は抱きしめて寝るだけにしておこうね。早く良くなつてくれよ」

誠伸さんがベッドの中に入って来て、優しくふわりと抱きしめてくれた。

そしていつもの様に優しく髪の毛を撫でてくれて．．．。
安らかで、穏やかで、心地良くて．．．。

私．．．幸せだ．．．。

心の中が幸福感で満たされていた。

* * * * *

あれから熱も出なくなり、体調も安定して、誠伸さんからもう大丈夫と太鼓判を押された。

その日の晩だった．．．。

「体の方も良くなったし、君の事抱いても良いかな？」
優しく抱きしめながら耳元でささやかれた．．．。

心臓はバクバク．．．。

「は．．．い。」

擦れる様な小声で返事をした。

震える様子を見て「怖い？」って聞かれて「ちよつと．．．。」
って返事をした。

誠伸さんの顔は上気し少し赤かった。

少し妖しげにうつとりしたような、情熱的な深い瞳をして見つめてくる．．．。

呼吸が荒くすごく興奮してるのが伝わってきた。

そして誠伸さんは．．．。

．．．私達は本当の夫婦になった．．．。

「愛してます。」って私がいったら、「ヨッコ、僕も愛してる．．．」
「って言ってくれださった。」

嬉しい．．．聖花じゃなくって、『ヨッコ』って呼んでくれた．．．

考えたら残酷だ．．．。

魂の抜けた聖花さんの体を使って、愛し合って、私は快感に溺れる．．．。

聖花さん、ごめんね．．．。

私、誠伸さんの事大事にして、尽くしますから．．．。

誠伸さんの事、凄く愛してるんです．．．。
許して．．．。

私に誠伸さんを下さい．．．そして、あなたの体を私に下さい．．．

(第5話に続く)

第5話 無言電話の恐怖（前書き）

（ご注意）

この小説は、異色ホラーサスペンスラブ小説です。

ありえないような状況に置かれた主人公が、数奇な運命に翻弄されながら、困難を乗り越え、自分の生きる道と幸せを掴んでいく物語がメインですが、文中残酷な描写が多くございます。

こう言ったものが苦手な方、またはメンタル的に弱いか低下中の方は、閲覧をおやめ下さいますか、十分ご注意下さいますようお願い申し上げます。

閲覧される方は、自己責任において閲覧下さいますようお願い申し上げます。

第5話 無言電話の恐怖

誠伸さんと本当の夫婦になってから半年．．．。彼の幸せそうな笑顔をみる事が最高の幸せであり、私の喜び．．．。

あの日、事故に遭わなかったら、何の変化もない尽くす恋人も夫もない、ただ憧れの院長先生である誠伸さんの写真を見て癒される．．．。

そんなつまらない人生を送っていたら．．．。

今はその人が私の夫であり、私の事を愛していたわってくれ．．．。

いくら脳死状態であったとはいえ、生命維持装置で確かに命を繋いでいた奥様．．．。

その聖花さんの命を断ち、犠牲にして、生きている私．．．。そのことを思うと辛く心が痛む．．．。

もし本当に命の終わりの時がきて、あの世があるのなら．．．。

もし、罪を裁く審判の神がいるのなら．．．。私が望んでこうなった訳ではないが、きっと私は裁かれて地獄に落ちるだろう．．．。

その罪は消えないと思うけど、生かされたこの命．．．今は今だけは、幸せを求めて生きてもいいですよ。

．．．．．聖花さん

もし、あの世であなたの魂と出会う事があつたら

私、あなたに償いますから．．。

どうか今は私を許してください

* * * * *

「うん、いいねえ．．」

腕を組んで、誠伸が大きなキャンバスの油絵を見て頷いている。

あれから私は、定期的に入院病棟の音楽サロンでピアノ演奏会のボランティアと、描いた絵の寄贈を始めた。

今、私の描いたF100号の大きなキャンバスの油絵を、入院病棟のエントランスホールの壁面に飾っている所だ．．。

「タイトル『光の輪舞』か．．。聖花は本当に絵がうまいね」

「いえいえ．．そんなことないです」

頬染めて、照れながら笑う聖花。

「温かな光の輪が、舞ってるような癒される絵だね。温かな優しい聖花の人柄が現れてるよ」

「そう言って貰えると嬉しいです」

「壁面に飾るとすぐに譲って欲しいって、声がかかるんだよね」

「この病院はセレブの患者さんも多いですものね。声がかかったら、セレブな方だったら、高めに売ってくださいね。それを患者さんに

還元してあげてくださいね」

「ああ。お陰様で、患者様にサビース向上出来るし・・・」

そう言っつて絵を飾っている時にもう声がかかった。

「うーん、素晴らしい絵ですね。これを描いたのは？」

50代後半のセンスのいい背広を着た、芸術家っぽい風貌の男性が声をかけてきた。

「この絵はうちの家内が描きました」

そう言っつて誠伸は、聖花の両肩に手をおいて紹介した。

「西原教授・・・」

聖花はついうっかりと名前を口にして、しまったっつて思った。

「ん・・・あなたは私の教え子かな？」

「ああ・・・いえ。外部聴講で教授のお話しを伺った者なんです
すが」

「そうでしたか・・・。私の弟子にしたいぐらい素晴らしいですよ」

「そんな・・・とんでもないです」

「この絵に似た画風の子が私の教え子の中に居ましてね。つい思い
出していました。」

才能があるから大学に残れっつてしつこく説得したんですがね、とて
も自分にコンプレックスを持つてる子で、自分に凄く自信が無かつ

たみたいで．．．。

卒業して、安月給のしょうもない工場に就職しちゃって．．．。

一年半ぐらい前に、この病院の近くで事故に遭って．．．。
亡くなってしまっただけ．．．。

悲しくてね．．．焼香に行ったんだが．．．。
才能に溢れた子なのに．．．遺影の写真を見たらもう涙が止まらな
くなってやってね．．．。

もう首に縄付けてでも大学に引き止めるんだって後悔してます
よ」

その話を聞いて、聖花は真つ青になった。

「あ．．．。こんな話聞かせてしまってすみません。この絵もし良
ければ譲って欲しいのですが．．．。250万はするかな」

「その素晴らしい生徒さんのお話しに心動かされました。是非貰っ
て頂けたら．．．。 お金は頂けません」

「それじゃあ申し訳ないですよ」

「いいえ、お願いします。その変わり今度ご教授頂けたら．．．。」

「おお．．．それなら．．．。 私も是非あなたのような素晴らしい
才能ある人を弟子として迎えたいです」

そしてあの絵は、一瞬壁面に飾られただけで西原教授が大切に持ち
帰っていった。

教授が帰って行った後、誠伸がぼつりと言った。

「あの教授の言っていた才能ある生徒さんって、君の事なんだね」

「教授がそんなにも思っていて下さったなんて・・・」

「大丈夫？」

衝撃を受けて足下がふらつく聖花を見て、誠伸が心配そうに抱き寄せた。

「せつかく病院にいるんだから、少し休んでいきなさい」

「えーっ。病院嫌いなのに・・・」

「最近絵に痕つめすぎだし、顔色悪いし、点滴していきなさい」

「えーっ。私、家にか・・・帰ります」

真つ青になって、慌てて家に帰ろうとする聖花の腕をしっかりと捕まえて、意地悪そうな顔で誠伸が言った。

「逃がさないよ・・・」

「じゃあ、ずっと付いてくれるなら言う事聞きます」

「じゃあ決まりだね・・・」

「注射怖い・・・」

半ベソの聖花。

「大丈夫！ 僕は針を刺すのが上手いでしょ？」

「う・うーん」

微妙な顔の聖花。

ベッドの上で横たわり、ポツリポツリと点滴液が落ちるのを見つめている聖花。

「ね、あまり痛く無かったですでしょう？」

「誠伸さんは針を刺すのが上手ですけど、やっぱり痛いものは痛いですーっ」

膨れっ面の聖花。

「文句言っていないで、しばらく寝てなさい。ついていてあげるから」

「手繋いでて・・・」

「聖花は甘えん棒だな・・・」

そう言っつて頭を優しく撫でる誠伸。

お互いに優しく深い眼差しで見つめ合う二人・・・。

・・・その時、誠伸の医療用携帯が鳴る。

「ちよっつとごめんな」

「私の事は大丈夫だからお仕事にもどって・・・。我が儘言っつてごめんなさいね」

「うん、また後で様子見に来るからね」

慌てて去って行く誠伸の後ろ姿を見送ってから、ウトウトと眠りについた。

どれぐらい眠っていただろう．．．。ふと目を覚ますと辺りは薄暗くなっていて、日が沈もつとしていた。

「あ．．．。ずっと寝ちゃったのね」

誠伸さんはまだ戻って来てないのね。

緊急の仕事で忙しいのね．．．。

見たらすっかり点滴の容器は空になっていて、ナースコールを押した。

「はい」とやって来た看護師は、20代後半ぐらいで、つり目のちよつとキツそうな感じ．．．。

名札に「羽崎」と書かれていた。

「すみません。点滴が空になったので、外して貰えますか？」

「はい」

無表情な機械的な感じに、消毒液と止血テープをもって来て、外そうとしたその時だった．．．。

「あ．．．いたっ」

グリグリつとねじるような、変な抜き方をされて激痛が走り飛び上がった。

聖花の声を聞いて、婦長がやってきた。

「ちょっと．．．。羽崎さん！！あなた何やってるの！！」

「す．．．すいません。患者様が急に動いたから．．．」

「えっ？」

驚いて呆気にとられて目が点になってしまった。

「なんて事いうのあなた．．．。あっち行きなさい」
婦長がカンカン顔で叱りつけた。

「奥様すみません。青くなっちゃいましたね．．．」

「大丈夫ですから、気にしないでくださいね」
作り笑いをして、やせ我慢する聖花。

「本当に．．．もう．．．」
困り顔の看護婦長．．．。

数日後、内出血して真っ黒になった腕を見て、誠伸が驚いた。

「それちょっと見せてごらん」

聖花の腕を見て、血管の筋を軽く指でなぞって確認する誠伸。
「酷い事になってるね」

「外す時に下手な看護師さんに当たってしまって．．．」

「それ誰なの？」

「うっん．．．忘れたから．．．」

「どんな感じの人？ 注射センターの看護師だね？」

「も．．．もう忘れちゃった！」

「聖花の事だからかばってるんでしょ？」

そう言つてふわりと抱きしめた。

「ごめんな。今度からずっと僕が付き添える時にするから．．．」

「えーっ。当分注射も点滴もいらさないわ」

「顔色悪いし、しばらく続けた方がいって．．．」

「昔はアレルギー持ちだったけど、そんなに体が弱くなかったのに．．．」

弱くなつちやつて、悲しいし、なんだか辛いな．．．」
シユンとなる聖花。

悲しそうな顔の誠伸を見て、慌てて否定する。

「あ．．．。弱音吐いてごめんなさいね。私頑張る！」

「ごめんな」

「誠伸さんが側にいてくれたら、私、大丈夫．．．」

* * * * *

それから暫くして家に無言電話が頻繁にかかる様になった。
決まって誠伸が病院にいる時間帯を狙つてかかってくる。

「もしもし．．．」

「……………」

「どなたですか？」

「……………」

「もしもし」

「……………あなたの事知ってますよ」

低い女性の声で、ぼつりと呟いた。

聖花は恐くなってガシャンと慌てて電話を切った。

私の事知ってるって……………どういう事？

まさかあの事を知ってるの？

あの無言電話の声を聞いてから、聖花は精神的に追いつめられたような気持ちでいっぱいになった。

あの時手術に立ち合った人は、執刀医である誠伸さんと、腹心の友とも言うべき脳外科医部長の笠原先生、そして誠治さんを崇拜するぐらいに思っていて、信頼出来る麻酔科医の田崎先生……………。そして、大ベテランの信頼出来る看護師さん 松本さんと佐野さん。

松本さんと佐野さんは、入院中ずっと付き添って面倒見てくださったし……………。

どの人も信頼出来そうな人達だ……………。

何であの事が露見したの？

- - -そしてまた電話のベルが鳴った・・・。

(第6話に続く)

第6話 闇の中の真実（前書き）

（ご注意）

この小説は、異色ホラーサスペンスラブ小説です。

ありえないような状況に置かれた主人公が、数奇な運命に翻弄されながら、困難を乗り越え、自分の生きる道と幸せを掴んでいく物語がメインですが、文中残酷な描写が多くございます。

こう言ったものが苦手な方、またはメンタル的に弱いか低下中の方は、閲覧をおやめ下さいますか、十分ご注意下さいますようお願い申し上げます。

閲覧される方は、自己責任において閲覧下さいますようお願い申し上げます。

第6話 闇の中の真実

恐る恐る電話をとったら、あの例の低い女性の声で、

「こんにちは．．．聖花さん．．．いえ、田中芳子さん」

「ヒッ．．．」

恐怖で思わず受話器を投げ捨てた。

床に転がった受話器から「もしもし．．．もしもし．．．」と声が聞えて来る。

しゃがみ込んでしばらく耳を塞いでいた。

どのぐらい時間が過ぎただろうか．．．ゆっくり耳を塞いでいた手を外したら、受話器は『ツーツーツ』と、電話の切れた音が鳴っていた。

受話器を戻して、慌てて電話線のコードをソケットから引き抜いた。

それから暫くして、インターホンが鳴り、マンションフロントデスクのコンシェルジェから来客の知らせが来た。

「綾瀬様の奥様に看護師の羽崎さんがご用があるとの事で来られますが、お通ししても宜しいでしょうか？」

あの看護師さんなら見覚えがある．．．。
誠伸さんがよこしたのかしら？

「分かりました。上にお通ししてください」

そして暫くしたら、インタホンが鳴った。

カメラで確認したらあの看護師だった・・・。

「はい」カチャリとドアを開けたら、ドアを引っ張って、スーツと自分から中に入り込んできた。

「ち・・・ちよつと、何でしょうか？」

「こんにちは！ この間お会いしましたね。看護師の羽崎です」

「何の用でしょうか？」

勝手に家に入り込んできて、キョロキョロ見回す。

「ふーん。院長先生のお宅って、こんな感じなんだ・・・」

「何なんですか？」

「私、先程お電話した者です」

キツそうなつり目が光り、ニヤリと笑った。

「え・・・それじゃあ、あなただったの？」

真っ青になって、脅える聖花。

「はい・・・田中芳子さん」

「何なんですか？」

羽崎看護師はいきなり聖花の腕をとって、服をまくりこの間の点滴の跡を見た。

「まだちよつと変色してますね、あの時はちよつとした御挨拶代わ

りだったのですけれど．．．。いかがだったでしょうか？」

「何なのいったい！！！」

「あなたに良い物をお見せしようと思って．．．」

そう言つて、聖花の手をグイと引っ張つて、ソファーに座ら、自分のバッグから写真を取り出した。

「この写真は、あなた．．．」

「ヒツ．．．」

それは円柱の硝子の水槽で、何かの液に使っている人間の脳味噌だった．．．。

あまりの衝撃に、ふーっと気が遠のいた。

だがすぐに、羽崎看護師に水をかけられて、意識を取り戻させられた。

「まだ続きがあるんだから、眠っちゃダメでしょう．．．。次はこれ．．．」

「いやああ．．．」

それはもつと残酷な写真だった。

頭の抜かれた聖花さんの写真．．．。

体は生命維持装置で生きながらえている様だった。

過呼吸になつてあえぎ呼吸しながら、非常ベルに手をかけた。けたたましい音で非常ベルが鳴り響く。

「チツ！」と舌打ちして、慌てて逃げる羽崎看護師。

* * * * *

ふーっと目を覚ましたら、病院のベッドにいた。恐怖で大きな悲鳴を上げたら、誠伸が飛んできた。

誠伸と目があったが、ただただ恐ろしくてパニックを起して、喚きながら手足をばたつかせていた。

押さえ込まれて注射を打たれそうになって、余計恐怖心が増長して、物凄い力でもがいていたら、男性の医師や看護師5人がかりで押さえこまれて、注射を打たれた。

打たれて数秒したら、意識が朦朧としてきた。

そして次に目覚めた時には、手足をベッドに固定されて動かなくなっていた。

薬のせいか、意識もはっきり定まらなくて抵抗したくても、さっきのように力が出てこない……。

「聖花……」

誠伸が心配そうな顔で見つめていた。

「あ……あ……あー」

薬のせいか、ろれつも回らなくて、言葉も上手く出てこない。

恐怖と悲しみと苦しみ……ありとあらゆる負の感情が押し寄せてくる。

信じて愛していた人がまさか……頭の中は酷く混乱してて、酷い興奮状態で何がなんだかわからない。

「ベッドに固定してごめん。暴れて怪我しそうだったから……。もう少し落ち着いたら、外してあげるから……」

また強い眠気に襲われて、眠ってしまい気がついたら朝になっていた。

「気分はどう？」

ずっとついていた様で、やつれて無精髭を生やした誠伸が心配そうに覗き込む。

「いやっ！見ないで……」

酷く疲れて、重い脱力感で体に力が入らない……。

「お願いだからあまり興奮しないようにして、君はあまり安定剤を使うと良くないんだ」

「あ……あれ……あの写真……」

「もう少し落ち着いたら話すよ……。今は何も考えないで……。気持ちを落ち着かせて……」

「こ……これ、ほどいて……」

固定された手を目で見て、哀願するように誠伸を見た。

「もう暴れたりしないなら……」

「しないから……。繋がれてるのはすごく苦しいの……」

「わかった」

固定された手足を解かれて、くるりと誠伸に背を向けた。

手足が痺れてるだろうと、誠伸が優しく手足を擦りマッサージしながら言った。

「あの看護師はクビにしたから、マンションのコンシェルジュにも

出入り禁止人物だと言っておいたし、もう大丈夫だから．．．」

もう抵抗する気力も消え、されるがままになりながら、聖花がぼつりと言った。

「家にかえりたい．．．」

「もう少しここにいた方がいいから．．．」

「あれ．．．私なんですね．．．」

「話しても大丈夫か？」

「聞かせて．．．」

「辛くてやめて欲しくなったら、そう言っただよ」

「わかりました」

誠伸は、あの日の光景を思い返す様に目を閉じて話し始めた．．．。

「あの日、僕は救急外来病棟を部下と巡回してた．．．。

その時救急車が滑り込んできて．．．。

すぐ目の前のバス停で事故が遭ったと．．．。

私が駆けつけたら、君は虫の息だった．．．。

見てすぐに一刻を争う状況だと言う事は分かった．．．。

意識不明の中で君が「生きたい」「怖い」ってかすれる様な小さな声で、呟いていたのが目に焼き付いてね．．．。

その日は救急外来は君1人だけで、救急外来担当主任医師は脳外科

専門医の黒木医師だった．．．。
彼はとても優秀な医師だったが、倫理的に非常に問題を抱えている人物だったんだ。

このことは後で分かったのだが．．．。

暫くして処置室の前を私が通った時は、君は心臓も停止して、死亡も確認されて、その後霊安室に安置されて、翌日ご両親が引き取って行かれた．．．。

私が救急車で搬入された時に見た時は、脳に損傷は無いように見えたのだが、その時には頭を包帯でぐるぐる巻きにされていたよ。

外傷は無かったが、脳内に出血を起こしていたのかと思っていたんだ。

だが、その頃君は、研究室の片隅で、培養液に入れられて必死に生きていたんだ。

黒木の手によってそんな風にされて．．．。

私やスタッフ達は夜、聖花の2度の脳死判定やら、生命維持装置を停止、ドナーに連絡の準備など色々立込んでて酷く慌ただしかった．．．。

その事もあって、院内の管理が手薄になっていたと言う事もあったと思う．．．。

聖花はその後、処置室の方に安置されたのだが、いつの間にか忽然と消えてしまってたね。院内はその事で、手の空いているスタッフは皆総動員となって、内密に院内巡回搜索が始まってね．．．。

懸命に捜したけれど、聖花はなかなか見つからなくて、いよいよ警察に届けようかと思った矢先の事だった．．．。

脳外科部長の笠原君が真っ青な顔をして緊急を要する事が起きたか

らとすつ飛んできて．．．。

笠原君は、黒木医師から突然に「お見せしたいものがあるから、至急、研究室にきて欲しい」と言われて行ってみたら．．．。

私もすぐ連絡を受けてね．．．駆けつけた．．．。

黒木医師の姿は無く、脳移植された後の君が横たわっていたんだ．．．。

初めは何がなんだか状況が分からなかったが、研究所の黒木医師の研究データを急遽解析して、何が起こったのか状況が少しずつ分かかって来て．．．。

今まで脳移植の成功例なんて．．．医療倫理的に許される事じゃないし、あり得ないと思っていたから、正直、生きているのが信じられなかったよ。

だけど、今にも消え入りそうな危険な状態だったけど、必死で生きようとしていたんだ。

私は、信頼できる医師を総動員して、急いでICUに搬入して助ける事に必死だった．．．。

何度も危険な状態になりながら、君は頑張ったんだ！生きようと必死に．．．。

研究所のデータは持ち出し厳禁だし、そう言うシステムになってるから、黒木医師も試みはしたが、逆にセキュリティロックがかかってしまって、持ち出せなかったようだ．．．。

解除できるパスワードを知ってるのは私とほんの僅かな者達だけだからね．．．。

そして、あのデータは、他の者の目に触れないように私が厳重に管理した。

本当は削除するのが一番安全だろうとは思っけれど、君の術後の治療にはどうしても必要だったからね．．．。

あの画像はコンパクトカメラのような物で隠し撮りされたものかなとも思えるんだ。。。

少しばやけてて、他の人が見たらタダのトリック写真だと思ってしまうし、君だなんて誰も気づかないと思うから、その点は心配しなくても大丈夫だと思うんだ、だからもうこれ以上は何も起きないと思ってるし。。どんな事をして君を守るからもう心配しないで。

「

「私。。あのまま死んでれば良かった。。あんな化け物。。

」

「それは違うよ。。私もマンシヨンの床に散らばっていたあの写真を見たけれど、とても心が痛かったよ。

あんな小さな所に君を閉じこめて。。黒木はなんて酷い事をしたんだって、芳子のように優しい素晴らしい人に。。怒りで気が変になってしまいそんな気持ちだったよ。

でも。。こんな風になってしまったけれど、生きていてくれて本当に良かったと思う。。」

「私は。。私の存在って。。あの写真の水槽の中にあつたあの不気味な物だけなんですよ。。

生きてるって。。そんなの言えない。。気持ち悪いだけです。。

元々美人じゃないし、男の人から見向きもされない姿形してましたが、まだ人間って言える存在だったけれど。。あんなの。。人じゃない!!」

「誰だって同じなんだって思うよ。こう考えたらどうかな。。脳は人の形の宇宙船に乗ってるんだ。。」

僕は誠伸と言う姿形の宇宙船に乗ってる．．．。

君は、聖花号．．．。

聖花は体だけ生きていただけで、魂はすでに死んでいたんだ。

聖花と言う宇宙船の乗組員は、自分の手でその船を手放してしまっ
た．．．。

だから、宇宙船を壊されて迷子になってしまった君がそこに乗った
だけ．．．。

それに、僕は君に出会えて本当に良かったって思うし。
生きていてくれてありがとうって思ってるんだ。

凄く愛してるんだ．．．芳子を．．．」

「誠伸さん．．．」

「聖花号の宇宙船に乗ってる、芳子が好きで、愛してる．．．。
僕の目の前にいる君は、皆と同じ形をしてるし、僕の頭の中は君と
同じ形の脳が入ってる．．．。

何処か違う？ 何処から見ても同じに見えるよ。一緒だよ．．．。
君の事は僕がずっと守るから．．．」

一生懸命励まそうとしている誠伸さんの優しさが、心に染み渡った。
．．．。

「誠伸さん、ありがとう．．．」
色々伝えたい気持ちはあっても、あまりにも色々な事が起き過ぎて
言葉が見つからなかった．．．。

黒木医師の事は、告発したかったそうだが、そうすれば私の事が公になる．．．。

病院を辞めさせるのが精一杯だったそうだ．．．。

その後別の病院で問題を起し、医師免許を取り消されたようだ。

その後の行方は分かって無いが、あの羽崎看護師は、黒木の恋人だったようで、私がマンションで非常ベルを押して、大騒ぎになったその日のうちに、退職願いを出して行方をくらませたらしい．．．。何処かに潜んでるかもしれないと思うと恐ろしい．．．。

．．．．あれから1週間後、退院して家に戻って来た。

酷く脅えてる私を心配して、誠伸さんが警備会社から女性のSPを雇ってくれて、出かける時にはいつも警護して貰う事になった。

その人は、齋賀朱美さいが あけみさんと言う28歳の人で、体格も良く武道にも長けた人で、凜として冷静で気が利いて、女性から見てもかっこいい感じの人だった。

頼れるお姉さんの人で、良いお話し相手にもなって貰って、心が癒された。

お陰で、一時食欲も落ち痩せこけて、嫌いな点滴と栄養補助剤を使わないといけないような状況だったが、最近食欲も戻って、家事もちゃんとこなせるようになった。

今日は西原教授のお宅に伺う日だ．．．。

あれから時々教授に絵の手ほどきを受けている。

まさか教授の教え子でしたなんて事言えないので、絵は独学で覚えて始めましたと言う事になっている．．．。

教授は凄く信じられないと、何度もこぼしていた．．．。確かにその通りだ．．．。

教授から沢山の事を学んで今の私があるのだ．．．。

「聖花さん．．．何か悩み事を抱えてるのかな？」

西原教授の家にお邪魔して、出来上がった絵をお見せした時に、しばらく考え込んでから教授が言った。

「え．．．」

「前回譲ってもらった『光の輪舞』は、明るい美しい彩色で生命力に溢れた優しさと強さを感じたが．．．。

今回の絵は苦悩に翻弄されている痛みを感じるよ。

作品自体悪くないんだが．．．」

「先生には誤魔化すことができませんね。

実は色々私事で悩んでいます」

「いいんだよ。今のあなたの心の内をキャンバスに思いつきりぶつけないさい。

心を隠すように遠慮しながら描いてないかな？

包み隠さずに思いつきり自分をぶつけて見なさい」

「はい」

「悩み事や迷い事も人を一回り大きく成長させる為の試練．．．修業だと思って、乗り越えるんだよ」

「教授．．．ありがとうございます」

「いやあ、君は本当に私が密かに愛弟子だと思っていた子に似てるな。その子は短い一生だったが．．．。勝手なお願いなんだが、その愛弟子を私は見守ってあげられなかったから、君にその代わりになって貰いたんだが．．．」

「え？」

「これからもずっと絵を続けていって欲しいし、私の弟子になってくれないかな？」

「教授．．．喜んで．．．。でも、弟子の方が頭を下げて弟子にしてくださいってお願いするのが普通ですよ!!」

「あははは．．．。君の様な素晴らしい才能のある子を手元において、もっと伸ばしてあげたくてね．．．」

「教授、是非是非お願いします。私その人の分まで頑張ります」

聖花は嬉しかった。

芳子だった時は、自信が無くて弱い自分に負けて、教授の元を離れて絵を諦めてしまった。

だけど、諦めた人生をやり直し、もう一度そのチャンスを掴む事が出切るのだ．．．。

(第7話に続く)

第7話 教授の心眼（前書き）

（ご注意）

この小説は、異色ホラーサスペンスラブ小説です。

ありえないような状況に置かれた主人公が、数奇な運命に翻弄されながら、困難を乗り越え、自分の生きる道と幸せを掴んでいく物語がメインですが、文中残酷な描写が多くございます。

こう言ったものが苦手な方、またはメンタル的に弱いか低下中の方は、閲覧をおやめ下さいますか、十分ご注意下さいますようお願い申し上げます。

閲覧される方は、自己責任において閲覧下さいますようお願い申し上げます。

第7話 教授の心眼

「ねえ、誠伸さん．．．。私、赤ちゃん生む事出来ないかな？」

「えっ？」

夜ベッドの中で聖花は、ここ最近ずっと考えていた事を誠伸に打ち明けた。

夫婦の生活はあっても、薬漬けで体に負担もかかる為、避妊して子供は作らないように、その点はきっちり誠伸が管理してきた．．．。

「私．．．子供が欲しいの」

「今飲んでいる免疫抑制薬は強い薬だから、奇形児が生まれる可能性があるから無理なんだが．．．。弱い薬なら脳死患者から臓器移植を受けて40代で出産した例もあるんだがね．．．」

「じゃあ私もその薬に替えて．．．。そうしたら赤ちゃんを生めるのね」

「だが、弱い薬だと君の体に何か起きるリスクが高くなって、不安なんだが．．．。それに、出産は体力もいるし、脳に負担をかける可能性もあるしね．．．」

「じゃあ弱い薬に替えて、何か異変があったらまた元に戻すから．．．。出産は帝王切開だって．．．方法はあると思うし．．．」

「うーん」

「複雑な事も分かってる……。心は私、体は聖花さん……。もし子供が持てたら……。私と聖花さんとあなたの……。3人の愛を受けた子だって思うの。。。

3人が融合して調和して、新しく尊い命が生まれるの。。。」

「うーん……。だが。。。」

「ねえ、お願い可能性があるのなら。。。」

「分かったよ。。。。薬を変えて見よう」

「ありがとう。。。」

「でも何かあつたらすぐ入院だよ。薬もすぐ戻すよ」

「わかりました。入院もいやがらないし、言う事聞きますから。。。。」

「心配だが。。君の気持ちを尊重するよ。。。」

* * * * *

「ほお。。。。これは素晴らしいね」

今日は、西原教授のお宅にお邪魔して、新しい作品をお見せした。

「はい。。。。今回は自分でも気に入ってます」

「どつやら悩み事や迷い事は、解決に向ってるようだね」

「はい」

今回の作品のテーマは『慈愛』。

誠伸さんのことを思っで描いた作品だ。

「どうだい。これを展覧会に出さないかい？」

「ええつ。これをですか？」

「うん。これはいいよ」

「嬉しいです」

心の中でもし入選したら、誠伸さんにプレゼントしようと思った。

これは、誠伸さんを思っで私の愛する心だから……。

「そうそう……気になっていたんだが……」

「はい……」

「絵の端っこにいつも君が書くサインだが……。アルファベットの筆記体の最後の語尾にデイジーの花が描かれてるが……」

「あ……。私の好きな花なんです」

にっこり笑って答えたが、教授は青ざめた顔をした。

「もしかして君は……。芳子君じゃあ……」

「ええつ？」

今度は聖花の方が真っ青になった。

「芳子って．．．私は聖花ですよ？」

「いや間違いない．．．君は芳子君だろ」

「教授．．．」

「この画風、このサイン、そして君の柔らかで優しい細やかな感性．．．」

どう見ても芳子君だ．．．。彼女にしか描けない絵だ．．．」

「．．．．．」

驚いて何も答えられなかった。

「あ．．．余計な事を言ってしまったね。聞き流してくれ。

私はそう言う風に思ってるだけだからね。

何も言わなくても良いから．．．」

「教授．．．」

「そのままの君で良いから、変わらずに描き続けるんだよ」

「はい。ありがとうございます」

帰り道、聖花は驚いた．．．。

自分の中にいる芳子を見抜いた教授．．．。

実際どういう風に思ってたのかは分からなかったが、
気がついてくれて少し嬉しかった．．．。

両親はどうしているだろう．．．。

色々な事がありすぎて、一度も様子を見にいつてないが．．．。
私死んでしまったと思っ込んでる。
いえ．．．本当に肉体は消えてしまっただから．．．。

家がそんなに離れてないのに、就職したら家を出て、アパートに一人暮らして．．．アパートには来ないでって遠ざけて．．．。
容姿が今ひとつなのも、アレルギーで肌汚いのも皆親が悪いんだって逆恨みして．．．。
悪い娘だっただな．．．。

今は街を歩いていたら男性に声をかけられるぐらいの美しい姿になっただけだ．．．。
だけど、時々芳子に戻りたいなって思う事もあるんだよ。
あんなにコンプレックスもってたのに、不思議だよ．．．。

両親が気になり、家の様子を見たかったが、今日はSPの斎賀さんと一緒．．．。
聖花の姿になった今は、私の本当の両親でも赤の他人だ．．．。
怪しい行動をとって、足をすくわれるような状況になっても良くない．．．。
ぐっつと我慢した。

後日、西原教授に是非うちに来て欲しいと呼ばれて、また家を訪ねた。
教授から会わせたい人達がいるからと、紹介されて非常に驚いた。

それは．．．。
．．．．私の両親．．．．

その前にボソツと教授から「私の愛弟子だと紹介するから安心して」

．．．と言われた。

教授は本当に私が芳子だって知ってるの？
どうして？

「こちらは私の愛弟子の 綾瀬 聖花くんです」
教授が私の両親に私を紹介した。

私の両親なのに今は初対面のように振る舞わなくては行けないのも
変な話だが．．．。

「は．．．はじめまして．．．」

お父さんは痩せてシワが増えたな．．．。
お母さんは白髪が増えて、ちよつと痩せたかな．．．。

「どうも初めまして．．．田中と申します」
父が丁寧に挨拶した。

お父さん、芳子だよ．．．よそ行きの顔しちゃって．．．。
お母さんも家だとガミガミうるさいのに、今日はニコニコして穏や
かそうに見えるな．．．。猫かぶってるでしょう．．．。

「聖花君、実は、田中さんが是非絵をお願いしたいと言いましたな
．．．」

「えっ？」

「実はうちの芳子にとても似た絵を描くお嬢さんがお弟子さんにい
ると聞きました．．．。．．。
しかも年齢も芳子と同じと聞きました．．．。．．。
この様にうちは金持ちでもないし、あまりお支払いできませんが、

小さな絵で良いのでお願いできないかと．．．」

「はい。是非描かせて下さい。

でも、お金は要りませんよ．．．。

私ボランティアで病院に絵を寄贈したりしてますし．．．」

「それじゃあ申し訳ないです．．．」

「いいえ．．．。お．．．お嬢様を亡くされたとお聞きしてます。

私の絵で、悲しみが癒えてくださればと．．．。

何かお力になればと思いますので．．．」

「なんて優しいお嬢さんなんでしょう．．．。ありがとうございます
す」

「田中さん、もし宜しければ弟子に芳子君の絵を見せてあげていた
だけないでしょうか？」

「それはもちろんです．．．。是非家にきてください」

「．．．．．そうして私は西原教授のお陰で、両親の家に行くチャン
スがやってきた。」

そして今日は実家に行く日．．．。

聖花の立場では、田中家のお宅を訪問する日．．．。

実は、誠伸さんも連れて来た．．．。

「芳子さんの絵に夫が興味を持ちまして．．．」と言ったが、本当
は私の両親に夫を合わせたかった．．．。

芳子が大きな病院の院長先生の奥さんになって、生きてます。なんて、まさかっと思っうよね．．．。

お父さん、お母さん、芳子は元気だよ．．．。

「こんにちは！ 今日はお招きくださり、ありがとうございます。」

あのこれつまらない物ですが．．．」

私はそういって、コージコーナンの焼き菓子セットと、綿松梅の高級ふりかけの詰め合わせを渡した。

両親の好きな物だ．．．。

「そんな気を使わないで．．．」って言うておいて、客が帰った後はすぐ封を開けて、喜んでバクバク美味しそうに食べるんだよね．．．。

ふふふつ。知ってるよ．．．。

「あの．．．。私の主人です」

私が両親に誠伸さんを紹介した。

「どうも初めまして．．．。今日は家内にくっついて来て、図々しく押しかけてしまってすみません」

誠伸さんの顔を見た途端に両親が青くなっただ．．．。

「あの．．．。奥様には失礼かも知れませんが．．．。娘が院長先生の大ファンだった様で．．．。

携帯の待ち受けに先生の写真を．．．」

私はギクツとした。

お母さん知ってたんだ．．．。きつと後で遺品を見て気がついたのね。

「もし差し障りなければ見せて頂いても宜しいでしょうか？」
誠伸さんが凄く見たそうに、嬉しそうな顔をしている……。
恥ずかしいよー。

「はい。どうぞお上がりになってください」

奥の和室に通され、お仏壇が置いてあり、私の笑った写真が飾られていた。

誠伸さんと、自分の遺影に手を合わせる。

自分の写真が飾られて、手を合わせるだなんて凄く不思議な気分だ。

お仏壇の所に大事そうに携帯が置かれていた。

そうそう……。

あのピンクの携帯……私のだ……。

母が大事そうに手に抱えて持って来た。

「あの事故でちょっと画面にヒビが入ってしまったのですが……
そう言って画面を見せた。」

「本当ですね。これは総合カウンターの待合室にある、医者紹介の
写真ですね……」
嬉しそうな顔をしながら、誠伸さんが意味深にチラリとこつちを見
た。

は……恥ずかしすぎる……。

「娘の声とか、動画とか色々入ってて、時々見るとは楽しんでいたの
ですが……」。

ある時電源を間違っつて落としてしまったら、セキュリティロックがかかってしまつて．．．。どうしても解除出来なくて．．．見れなくなって残念に思つてるんですよ」

「あの．．．私に貸していただけますか？」

私は手慣れた感じでロックを解除した。

それから次からロックがかからない様に、機能を解除した。

「な．．．なんで 分かつたのですか？」

父と母が仰天した。

「私、予知能力が少し備わつてまして．．．頭に数字がフーツと浮かんだんです」

「ほほおー。それは物凄い能力ですね」

父が感心してる．．．。母も横で頷いている。

だまされちゃつてお父さんらしい．．．。

お母さんもこつ言つこの信じちゃうんだよね。

その横で、誠伸さんが呆れ顔．．．。

「宜しかったら、娘のビデオとか見ますか？」

父が見せたくてうずうずしてる。

「お父さん．．．そんなの綾瀬さん見ませんよ!」
苦笑いして、母が嗜める。

「是非見たいです」

誠伸さんが身を乗り出して、乗り気になつてる．．．。

うわぁー。見られたくないビデオもあるのに・・・。

それから絵はもちろん、アルバムやら、ビデオやら、私のものを誠伸さんは沢山堪能し、私は赤面し・・・。

母の手作りの晩ご飯を食べて、凄く楽しい時間を過ごせた。

帰り道、誠伸さんがポツリと言った。

「今日は芳子の事が良く分かって、凄く嬉しかったよ」

「私も母の手料理が食べれて、家に帰る事が出来て、凄く嬉しかった。

でも、見せたくない物まで見せるから、凄く恥ずかしかったな・・・

」

「僕は凄く嬉しかったよ。田中芳子さんって凄く素敵な人なんだな
って、再認識したって言うかね・・・」

「本当に？」

「本当さ！..」

「そう言って貰えて、凄く嬉しい・・・。また遊びに行けそうだし、
嬉しい事がいっぱい・・・」

「なあ、もし赤ちゃんが出来て生まれたら、ご両親に抱いてもらおうな
..」

「うん」

教授がどうして私が芳子だって分かったのかは謎だけど、きっと心の目で私の絵を見て、同じ物だって悟ったのでしょよね……。それだけ凄い人だから……。

……西原教授ありがとうございます。

あなたのお陰で、両親に会えだし、誠伸さんを両親に合わせる事が出来ました。……

(第8話につづく)

第8話 調和と融合（最終話）（前書き）

（ご注意）

この小説は、異色ホラーサスペンスラブ小説です。

ありえないような状況に置かれた主人公が、数奇な運命に翻弄されながら、困難を乗り越え、自分の生きる道と幸せを掴んでいく物語がメインですが、文中残酷な描写が多くございます。

こう言ったものが苦手な方、またはメンタル的に弱いか低下中の方は、閲覧をおやめ下さいますか、十分ご注意下さいますようお願い申し上げます。

閲覧される方は、自己責任において閲覧下さいますようお願い申し上げます。

第8話 調和と融合（最終話）

免疫抑制剤の弱い薬に変えてから半年．．．。
今は子作りに励んでいる。

あの羽崎看護師の恐怖から半年が過ぎて、今ではSPも付けなくても不安なく外出出来るようになった。

今日は絵が完成したので、両親の家に届けに行く。
母が手作りのお昼ご飯を用意してくれる．．．。

聖花として行くから、ちよつと他人行儀に振る舞わなくては行けないのは、ちよつと辛いけれど、実家に行けて、母と父に会えるのはとても嬉しい．．．。

絵は『碧の夢』と言うタイトルの絵にした。

柔らかな風に優しく揺れる森の木々のイメージだ。
この絵を見て癒されて貰えたらいいな．．．。

「こんにちは．．．。綾瀬です」
インターホンを押して、挨拶する。

『トットトト．．．。』と母が慌てて玄関に向う音が家の中から聞えて来る。

ドジな母は時々『ガラガラガシャン！』とか『ドタツ』とか、物にぶつかつたり、蹴躓いたりして、その音がまる聞えだ．．．。

きつと父は、ソワソワしながら何事も無かったよふりをして新聞を広げてる事だろう．．．。

玄関ドアがガチャリと開いて、母が出てきた……。
「いらっしやい。どうぞ上がってくださいね」

母を見て『おおーっ!』と思った。

その服よそ行きじゃないの？

普段着を知ってるから、なんだか可笑的い……。

本当はあなたの娘だよ……。

「おじやまします」と言いながら、心の中で『ただいまーっ』と言った。

和室にお父さんが居て、思った通り側に慌ててたたんた新聞が置かれてる。

「こんにちは」

「やあ、いらっしやい。」

お父さんもよそ行きのズボン履いて、アイロンのかかったYシャツ着て、よそ行きの顔してるわー。ふふっ。

「まあ……素敵……」

「ほお……これは素晴らしい……」

聖花の絵を見て、父と母はとても感激してくれた。

「気に入ってくれましたか？」

「ええ」

「いやあ、最高です」

「あら？このサイン．．．」
母がサインを見てとても驚いた顔をした。

「芳子も絵の端に書くサインの語尾にこんな花を描くんですよ．．．
全く同じで驚いたわ．．．」

「私、デイジーの花が大好きなんです。だからサインに愛着を込めて、この花を描いています」

「まあ．．．なんだか聖花さんは、芳子の生まれ変わりみたいな気がするんですよ．．．」
もう娘が帰ってきたみたいないな気持ちなんです。

これからもチョコチョコ気軽に顔を見せて下さったら嬉しいのですけれど．．．」

「はい、喜んで．．．是非これからも遊びに伺わせて下さい」

帰り道、聖花は嬉しくてたまらなかった．．．
自分の素性は明かせないけれど、この先も堂々と、両親に会いに行ける．．．。

そして母が私の事を娘のように思ってるって言うてくれた．．．
それに、淋しそうだった両親が、私が行くととても楽しそうに笑ってくれる．．．。

帰り道、ホームに立って電車を待ちながら、今日、両親とおしゃべりして笑いあった楽しい出来事を思い出していた。

時々父が寒い親父ギャグを連発して．．．母がドジってキッチンから賑やかな音が聞えて来て．．．。

つい可笑しくて、思いだし笑いしてニヤニヤしていた．．．。

電光掲示板が点滅して『間もなく電車が入ります』と表示され、ア
ナウンスが流れた時だった。

『ドーン！』と後ろから物凄い力で突き飛ばされて、聖花は線路
に転落して、その直後電車が入って来た。

突き飛ばした人物は、羽崎元看護師だった．．．。
逃げる気も無い感じで、すぐに逮捕された。

．．．聖花は！！．．．

運良く線路の窪みに落ちて、その上を電車が通過したのでセーフだ
った．．．。

が、落ちた時に頭を強く打って意識不明となった．．．。

羽崎元看護師は、実は黒木元医師と内縁関係にあった。

黒木医師の、猿を使った脳移植研究は、誠伸が医療倫理に反する行
為で望ましくないから、やめるようにと命じていたのにも関わらず、
ずっと密かに研究を続け、数例成功させてからは、恐ろしい事を考
え実行してみたくてたまらない衝動に駆られていた。

．．．それは人体を使った研究だ．．．。

綾瀬総合病院に在籍する頃、脳外科のゴッドハンドと言われた綾瀬
医院長と、それに続く有能な笠原脳外科部長に憧れながら、反面嫉
むような気持ちと、自分の方が本当は優れているという自負があっ
た。

その事を証明する為には．．．誰も手掛けた事の無い手術の技を、
この目で完成させるしかない。そんな衝動と欲望に取りつかれてし

まった。

．．．．．そして、交通事故で脳に損傷は全くないものの、今にも命の火が消えそうな芳子と．．．。

．．．．．脳死判定され、生命維持装置を外された聖花．．．。

まるで神が自分に与えたチャンスの様にも思えた。

．．．．．本当は悪魔が与えた罠だったのに．．．。

その黒い罠に嵌り手を染めてしまったのだ．．．罪と言つどす黒い色に．．．。

それを手伝ったのは愛人でもある羽崎元看護師。

黒木は病院を追われたが、満足だった．．．。

そう思っていたが．．．。

欲望は止めどなく溢れ、別の病院に勤務するようになった時に、医療倫理に反する行為にまた手を染めてしまった．．．。

そして．．．医師免許を剥奪された．．．。

それは黒木にとって、死刑を宣告されたのも同然だった．．．。

それから蛻けの殻になってしまい、羽崎元看護師が働き、黒木は家で一日酒浸り．．．。

とうとう肝臓を悪くして、命を落とす事になってしまった。

その事を恨んで、黒木のパソコンに唯一残っていた画像データから写真をプリントアウトし、聖花を脅したり、線路に落としたりした。

．．．．．全くの逆恨みだった．．．。

羽崎元看護師が何故、聖花を集中的に狙ったのかは謎だが、おそらく誠伸よりも聖花の方がターゲットとして狙いやすかった事と、愛する人を失う辛い気持ちを誠伸に味あわせてやりたかった事、黒木が憧れていた誠伸を攻撃する事に抵抗があった事だろう……。

羽崎元看護師の事件は、問題行動が多く病院を辞めさせられ、体を壊して亡くなった黒木の事を、逆恨みした犯行と言う事で片付けられ、幸いに脳移植の事は明るみには出なかった。
あの写真も嫌がらせの為に加工した合成写真と言う事で片付けられた。

* * * * *

――綾瀬総合病院 集中治療室

聖花は硬膜外血腫発生し、開頭血腫除去手術を受けた。

――その頃聖花（芳子）は不思議な夢を見た。

『じじはどこ？ 暗くて霧に包まれて何も見えない……』

やがてうつすらと光が見えて来て、川が見えてきた。

『川の向こう側は、明るくて光に包まれて、綺麗……』

行ってみたい……この川を渡って……』

……その時だった、女性の声が聞えた。

『ダメッ！！ その川を渡ってはダメよ！！』

『え?』

聖花（芳子）は声のするほうを見た。
あれは．．．私?

『川に映る自分の姿を見て!』

その声に言われて、川に自分の姿を映して見た。

『え．．．芳子に戻ってる．．．』

『そう．．．私は聖花．．．そしてあなたは芳子さん．．．』

『本物の聖花さん?』

『そう．．．』

『あなたの体を使わせて貰って、ごめんなさい。怒ってますよね?』

『安心して．．．怒ってないわよ』

『本当に?』

『私は自分から死を選んでこうなったの。だから、未練は無いの。
誠伸さんの事も気にしないで大丈夫よ』

『ありがとうございます．．．感謝します』

『あなたはまだやる事があるから、こっちにきてはダメよ!
お腹の子を育ててあげなくちゃ．．．』

『え?』

『あなたの子よ．．．私の子じゃないからね』

『赤ちゃん？』

『まだとても小さいけれど、元気よ！ 男の子と女の子の二卵性の双子．．．』

誠伸さんと幸せにね！

さあ、あなたは来た道に戻って．．．。

恐くても絶対に戻って来てはダメよ．．．。

誠伸さんが呼んでるから、大丈夫！！』

『聖花さん．．．ありがとう．．．』

『またね』

『また会えるの？』

『そうねえ．．．まだ当分は無理かしら．．．。そのうちねっ。さ

あいつて！！』

『また．．．』

『バイバイ．．．』

『ヨッコ．．．ヨッコ．．．』

．．．ふわふわとても気持ち良かった場所から、ズーンと重く体に重力がかかって、いきなり痛みを感じる場所にもどって来た。

「うーん。い．．．いた．．．」

「ヨッコ」

初めはぼんやりだったけど、ゆっくりと心配そうな顔の誠伸さんがはつきり見えた。

「誠伸さん」

「よかった．．．」

「私ね．．．聖花さんに．．．あつた．．．」

「まだあまり喋らないで、ゆっくり休んで．．．」

「うん．．．」

また深い眠りに誘われた．．．。

* * * * *

．．．それから1週間．．．。

聖花は集中治療室を出て、一般病棟の個室部屋に移った。

もう何度かここに入院した事があるので、お馴染と言えばお馴染みだけど．．．。

「せっかく伸びて、長くて綺麗な髪だったのに、治療の為に剃ってしまつて悪かつたね」

「ううん。髪の毛はまた伸びるから．．．。何度も私の命を救つて

くれて、ありがとう・・・」

「こちらこそ、元気になってくれて、僕の所の戻ってきてくれてありがとう。すごく嬉しいよ」

「私ね、聖花さんに会ったの」

「実は僕も・・・」

「えっ?」

誠伸さんの話しでは、ある強い薬を使おうとしたら、フーツと聖花さんが目の前に現れ、「彼女のお腹には赤ちゃんがいるからその薬はダメよ」と言われたとか・・・。

「不思議な事ってあるんですね」

「本当だね」

「私ずっと罪悪感を心の底に抱いてましたが、聖花さんに許してもらえてホッとしてます」

「実は僕も・・・心が救われたよ」

お互いに見つめあって微笑みあった。

「そうそう・・・。2カ月だったよ」

「え?」

「僕達の赤ちゃん」

「嬉しい・・・」

「まだ胎嚢が1つしか確認出来ないんだけど、夢の中の聖花は双子のような事を言ったんだよね？」

「なんですけどね・・・」

「1人でも双子でも何でも、僕は嬉しいよ・・・」

「私も・・・」

・・・それからしばらくの後、二卵性の双子だと言う事が分かった。
男の子と女の子・・・。

* * * * *

・・・それから55年後・・・。

「ヨッコ・・・。ご苦労様・・・そしてありがとう」

聖花（芳子）は82歳で眠るように生涯を閉じた。

病院は、双子の男の子『芳信』が後をついだ。

双子の女の子『聖美』は二人の子を立派に育て家庭の主婦として幸せに暮らしている。

夫は医者で、綾瀬総合病院の副院長だ・・・。

「俺よりも先に逝ってしまったけれど、最後まで面倒を見る事が出来て良かった・・・。それはヨッコとの約束だったからね」

誠伸は、聖花（芳子）との思い出をあれこれ思い返していた。

ヨッコは一生懸命頑張って生きてくれたね。

そして子供も残してくれて・・・。

今の世でも脳移植は倫理に反して認められない事だけど、僕は・・・
ヨッコを救い出す事が出来て良かったって思うんだ・・・。

僕はヨッコと共に生きる事が出来て本当に幸せだったよ。

・・・芳子本当にありがとう・・・。

（・・・完・・・）

第8話 調和と融合（最終話）（後書き）

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

脳移植は医療倫理に反する事だと思っておりますが、もしこんな事が起きたらと想像して書いた作品です。

内容的に、残虐性の高いシーンや表現がりましたが、最後は温かな雰囲気で終らせられたかなと思っております。

辛いシーンなどがありました。最後までお付き合い下さり、読んで下さった読者様に感謝致します。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3212u/>

罪の骸（つみのむくろ）

2011年6月27日17時19分発行